
叙杏の目

和宇之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叙杏の目

【Nコード】

N2763P

【作者名】

和宇之

【あらすじ】

「理」とは世界人口レベルで極少数の人間だけが持つ特異能力の総称だ。

どんなに絶大で脅威であっても、「自然界における律から逸脱した力は発生しない」という二百年前の学説から「自然の摂理」の理をとって「理」と呼ぶようになったらしい。

事実、どの「理」も元をただせば自然の道理に従った能力に過ぎなかった。

だから、人を癒す「理」があっても死んだ人間を蘇らせる「理」は

存在しない。時間に干渉する「理」もない。

自然界、人が生きていく日常のなかで絶対にありえないことは「理」のなかでもありえない。

そんな、「理」を持つ軍人はある事故現場で、音信不通だった
兄弟夫婦の娘と出会う事になる。

世界は、文字であふれている。

叙杏だけが見ることのできる世界だ。

文字ばかりがそれこそ文字通りにあふれていて、豪雨のように煙り、前も見えない有様になる。

無数の文字たちの群れがありとあらゆるものたちから、人も建物も生物も無機物も関係なく煙のように立ち昇り、世界すべてを覆い隠して充満している。もしこれが有毒ガスだったら、きつと世界の生き物たちは一分も立たずに死んでしまうだろう。

いや、吸い込むことがなくても、そこにあつて「見える」だけで有害なものもある。

まさにこの文字たちは、猛毒だ。

体内に取り入れてもなんら害はないけれど、そもそも見えるだけで明確な形でさえないものだが、心臓の弱い人間ならたちまち心臓麻痺を起しかねない威力を持つ。神経の図太い厚顔無恥のような人間だって、ずっと見続けていたら屋上から飛び出してみなくなるかもしれない。

生まれついて、叙杏はその有毒で無邪気な文字たちに囲まれて育った。

この叙杏の世界、彼が裸眼で見る世界すべてに蔓延する文字たちの群れが、つまるところ人の思いであり記憶そのものだと思ったのはつい最近の話ではない。

この文字たちがいろんな意味で膨大な秘密を抱えていると気づいたのも、幼いときだ。

人の思いや記憶なんてものは、あけっぴろげに他人に見せびらか

せるものであるほうが少ない。知らず知らずに覗き見た事実は山のようにある。幼いときは無意識に、成長してから是否応なく。叙杏のありきたりな黒い眼は、その平凡さとは無縁に暴かなくてもいい嘘や本音を見続けてきた。

叙杏に、嘘は通用しない。

今もそうだ。

埋め尽くすばかりの文字の群れを避けて、叙杏は自分が必要としている文字の羅列を探す。

文字であっても文章ではなく、まとまった意味にもなっていないそれらを後目に、ただ求めている真実を探し出していた。

「どうだ？」

と、声としての言葉が存在しない文字たちだけの世界のなかに、音を伴った言葉が入り込んできた。

叙杏は声に応える前に、右手に持っていた眼鏡ケースから黒縁の眼鏡を取り出した。不恰好にフレームの大きい、どう見てもおしゃれとは程遠い眼鏡をかけて後ろを振り返る。

眼鏡をかけた瞬間から、叙杏の世界は彼だけに用意された世界の色をなくす。

文字があふれかえり他には何も見えない世界から、他の、叙杏以外の人間が見る世界へとすりかわる。

叙杏は、倉庫の中にいた。天井が高く奥行きも広い、コンクリート造りの倉庫だ。

その広い空間の大部分を占領する形で大きさの様々な鉄くずめいた物体が置かれ、その周辺を数台の照明器具が囲んで照らしている。これは、列車の残骸だった。

つい数時間前まで確かに線路を走っていた鉄の乗り物の成れの果て。かろうじて形を残す一部分の座席や歪んだ車輪が、原形を留めない鉄くずに混じって生々しく破壊された姿を晒している。

「一瞬だったみたいですよ」

叙杏が応えると、後ろのすこし離れた位置に立っていた男は首を

傾げた。

具体的には？ と無言のまま先を促してくる彼に、頭のなかでさきほど見たばかりの文字たちを思い出した。

「ほとんどの文字が途中で切れていました。突然、ぱつさりと切り捨てられたみたいに」

残骸の中でみたのは無断に千切れた文字の断面ばかり。当然続くはずだった思考の、唐突の沈黙だった。

そこから分かるのは、和やかに、ずっと穏やかに続いていくはずだったものを理不尽な暴力によって奪われた、ということ。この場合は、列車が脱線し車体を破壊させたことに他ならない。

「こんな状態になるケースはふたつしかありません。考える間もなく死んだか、意識を失ったか。どっちにしろいきなりだったのは確かです」

どうですかと目をやると、男はもっともらしく頷いた。ただ頷けばいいのに、よこす表情は満面の笑みだ。よく出来ました偉いね、笑みの意味はそんなところだろう。

相変わらず偉そうで、気取っている。

声に出してはいえない分、遠慮なく叙杏は心の中で悪態をついた。そうすると、人を馬鹿にするその笑顔はもとより精油で前髪を後ろに流した黒髪も同色の目も、右手の中指にいつもはめている緑色の宝石をつけた指輪も、しまいには軍から支給されている紅色の軍服さえ、なにかも気取って見えるから不思議だ。

特に軍服に関しては同じ部隊に所属している叙杏も同じ色のものを着ているから、彼の軍服だけが気取って見えるのはやはり偏見なのだろう。

緋啓と、彼の名前で彼を呼ぶことはなかった。他の人間もそうだが隊長で、大佐殿。役職名と階級名で呼ばれ、それが皮肉にならないうのが彼だ。生粋の愛国主義者で垢抜けた都会の男。公私分離を実行し仕事も遊びも手を抜かずにやってのける軍人の鑑、彼に当てはまる言葉を上げていくだけで、緋啓が優秀なのを思い知ってい

くような気がする。

「で？ もし、いきなりじゃなかったらどうなる？」

と、緋啓が聞いてきた。

叙杏は自然と自分の眉間にしわが寄るのを感じた。よく出来ましたと笑っておいてケチをつけるのか、と緋啓を睨む。

しかし、緋啓は笑っているだけで質問を取り下げようとしない。まったく嫌な笑みを浮かべてくる。

仕方なく、叙杏は口を開いた。

自分だけが見ることの出来る「人の思いや記憶が文字として視覚できる世界」を、隊長に分かるように説明する。この上なく面倒で厄介な作業ではあったが、これも仕事のうちだ。ちゃんと緋啓が理解しているかは、分からないけれど。

「もしいきなりでなかったら、文字は途切れたりしません。いえ、最後に死ぬのなら文字は消えます。それでも、唐突には終わらないゆっくりとかすれて読めなくなつて、見えなくなる。それだけです」

そうして、死を目の前にした人間の思考は簡潔だ。

助けて、と叫び続ける。助けて助けて助けて助けて、と同じ文字だけが驚くほどの濃度で密集する。

そして、そうやって死んだ人間の残留思念は強烈だった。

生きている人間の思考を直接読むときと同様、それ以上の濃さで思いが死んだ場所にこべりついているのだ。だんだん意識が遠のき、死に逝く様がかすれてみえなくなる文字から伝わってくる。助けてと思い続けながら助けられずに死んでいった人間の遺す気持ちは、叙杏からすれば呪いに等しい。

嘔吐だけで済めばまだいいほうで、当てられれば寝込むときもさらにある。

単純に一点に向かって注がれる強い思いは、見るほうにとっては負担すぎるのだ。

「それでお前の意見は？ 事故だと思う？ 事件だと思う？」

質問というよりはナゾナゾに近い緋啓の問いに、叙杏はにべなく

首を横に振り、

「事件でしょう？ 警察の姿が見当たりません」

答えてからすこし、眉をひそめた。

「それに調査会とかもまだ、入ってませんよね？」

それは、怪訝に思いながらも最初に気づいた事だ。

列車が脱線し多数の犠牲者を出したならまず、事件と事故の両面から調査するだろう。

その場合最初に論点になるのが「どうして脱線したか」であってそれを調べるのに「人の心を読む」叙杏はあまり役にたたない。なのに列車の残骸には、引きちぎれた思考の断面しか見当たらなかった。事故後、残骸を見たものはいても触れた者はいなかった証拠だ。触れずに調査など出来るわけもない。

「事件だと断定しているとは思えないんですが」

「断定しているわけじゃない。どちらかといえば、希望だな。藤印国民間鉄道事業の取締役殿たつての、ご希望だ」

緋啓の口調は至って軽かった。

アイスクリームはバナナよりも絶対にチョコだな、ぐらいの気軽い希望のレベルで、列車の惨事が事故ではなく事件なんだよ、と言っている。

「叙杏も知ってるだろう？ あそこは色々と上客なんだよ。警察にしても軍にしても。だから、出来れば穏便にすませたいわけだ」

穏便という言葉もこんな使われ方をすると、とんでもなくきな臭く聞こえる。

そして直接言及せずとも緋啓がほめかしていることはさらに、きな臭い。

政治的な思惑に顔をしかめる叙杏とは対照的に、暗に裏取引があったと暴露した上司は後ろめたさのかけらもなく、からりと笑い、「さすがにこれだけの惨事を隠蔽は出来ないから、出来れば事件つてことで電車事業に悪影響が及ばないようにしたいんだろ？ 俺たちで俺たちの出番ってわけだ」

親指を立てて、自分を指差した。

藤印国軍内部でも一握りの軍人しか着ない紅い軍服。「俺たちの出番」と告げた言葉の意味は明らかだったが、叙杏はとりあえず上司にたずねた。

「犯人は、理保有者と？」

至極あっさり、緋啓は頷いた。

「これは妥当な線だろう？ 事故じゃなくて事件なら、理保有者が絡んでないと片付かないさ。事件なら、百パーセント理保有者が絡んでる。一般人に列車をこんな風に出来る技量があるか？」

問いかけに叙杏は首を横に振った。確かに発破でも使わない限りは無理だ。そして列車は脱線されたわけではない。

しかしそれでも不満はしこりのように残っていて、

「つまり調べてる最中にこんな事ができる理が見つからなければ、百パーセント事故なんですね？」

と、つつけんどんに上司に聞いた。

喧嘩腰にも等しい叙杏のその物言いに、緋啓はにつこりと微笑み、「だからって手を抜くなよ？ 調べてて見逃したらお前の責任だからな」

と、叙杏に釘を打つ。

その言葉裏を勘ぐれば、きつとこんなところだ。

「理」を敵視する世の中にむかつくのはいいが、ちゃんと仕事しろ。周囲のお前に対する評価も落ちるぞ。

手抜きをしたと思われれば、実際に手抜きをしてなくとも言われるだろう。

「やっぱりあいつは「理」保有者だから同じ「理」保有者を見逃したんだ」と。

叙杏の目も「理」と呼ばれるものの定義のなかに含まれていた。

「理」とは世界人口レベルで極少数の人間だけが持つ特異能力の総称だ。

どんなに絶大で脅威であっても、「自然界における律から逸脱し

た力は発生しない」という二百年前の学説から「自然の摂理」の理をとって「理」と呼ぶようになったらしい。

事実、どの「理」も元をただせば自然の道理に従った能力に過ぎなかった。

だから、人を癒す「理」があっても死んだ人間を蘇らせる「理」は存在しない。時間に干渉する「理」もない。

自然界、人が生きていく日常のなかで絶対にありえないことは「理」のなかでもありえない。

緋啓のずば抜けた洞察力は、そのことをまざまざと叙杏に思い知らせている。

叙杏の目は緋啓にはない。それでも人の考えている事を看破してみせるこの男は、「理」とは結局恐れるほどのものではない」とした学説を裏付ける叙杏なりの証拠だった。

けれどやはり「理」を持たない大多数の人間は、「理」を恐れるわけで、

今回の一件が火種になるのは、間違いない。

「それで？ どうするんですか。「理」保有者を探すにしたらって、鉄道事業に恨みを持つてる奴をリストアップしろと？」

「まあ、その手もあるにはあるが。まどろっこしいだろう？ 今はまだそれよりは堅実的で確実な方法があるから、リストアップは後回しだ」

想像に難くない今後を憂いてため息混じりに訊ねる叙杏に緋啓は応えんと、目を倉庫の出入り口のほうへ向けた。

「まずは、生存者の心を読んでもらう」

叙杏は眉をひそめた。

「生存者、ですか？」

あいにく、こんなに列車が酷い有様なのに生存者がいたのか、と感激する事は出来なかった。

むしろ、生きている人間がいたのかと思った途端、グツと、胃の奥がねじれたように痛みを訴える。

無意識に飲み込んだ唾の味が胃液のようにすっぱい。死を直視させられたまま死んだ人間の残留思念は強烈だが、もつと強烈で最悪なのが死を直視させられたまま生きながらえている人間の生の感情なのだと、叙杏は知っている。生きている分、容赦ない濃さと途切れる事のない叫びが物凄い勢いで襲い掛かってくる。

はじめて緋啓の命令で死に掛けの人間の心を読んだときのことは、今思い出しても吐き気がしてくるほどだ。

叙杏はあの時、本当に死を覚悟した。触れることの出来ない人の思考に食い殺されると心底怯え、生きることを諦めかけた。

それだけ、ひとつの思いにとらわれた人の思いは強いのだ。強く、そして、簡単に人の理解の範疇を超えてしまう。

人の心を読むことが心の底から恐ろしいことだと気づいたのは、そのことがあつてからだつた。

「安心しろ」

重傷患者の中の心を連想して青褪めた叙杏の顔に、緋啓はにんまりと笑う。

「今回の生存者は奇跡的に大怪我をせずにすんだ方々だ。計四名いらつしゃる。妖しいだろ？ あんなに列車はめちゃくちゃになつてるのに無傷なんだ」

「……奇跡が起こつたんじゃないですか？」

「奇跡は起こらないから奇跡だろう？」

叙杏の弱弱しくも女々しい言い分を緋啓はにんまり顔のまま一蹴すると、唇をもつと引き伸ばして笑つた。すると、なにかをほくそえんでいる顔から凶悪に悪巧みをしている顔になった。

一応は人である極悪人から悪魔にでも様変わりした、という感じだ。

緋啓は悪魔の微笑をまんべんなく浮かべて、その自分の笑みに手遅れながら後悔しはじめたらしい部下の肩をたたいた。

「叙杏」

優しい声で人を殺せるなら今の声で叙杏は死ねただろう。そんな

緋啓の声だった。恫喝も凄みもないのに、人を圧迫させる声だ。

悪魔の笑みではなくて本当の悪魔にでもなったのかもしれない。

「お前の力は、担保になってるよな？ お前の潰した事業の借金、肩代わりしてやってるの 誰だっけ？」

「軍、です。正確に言えば、貴方と、貴方が属する藤印国軍特殊技能部隊の予算から」

叙杏の答えに緋啓はゆっくりと頷いた。

分かってるじゃないか。と感心するでも納得するでもなく、あからさまな威圧をこめて向けられる笑みに叙杏は息を詰める。

できる事といえば、彼に意見しようとした自分の行為を悔いるくらいだ。

叙杏の目は、彼自身だけの目ではなかった。到底返済しきれない莫大な借金の担保に取られた、「理」そのものでもある。

だから緋啓が隊長の権限で「叙杏の力を使う」と決定すれば、叙杏は従うしかないのだ。そこに叙杏が疑問や拒否をはさむ事は出来ない。

沈黙を護る叙杏に緋啓は一回満足げに頷いてから彼の肩をたたいた手を引っ込めて、踵を翻す。

「もう最初のひとりが待っているはずだ。行くぞ」

最初から叙杏のために用意されている選択肢はない。

歩き出す緋啓を、叙杏は追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763p/>

叙杏の目

2010年12月2日23時40分発行